

Not-God

『アルコールリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第四章 成熟を願うAA

1939年10月-1941年3月

他者を求めて—AAが周知される時代

Presented by
なかやま ひいらぎ

1

はじめに

第四章の構成

1. 第三のグループ **クリーブランド**とAAの周知
2. **ビル・W**のドライドラックと**ダウリング**神父
3. **ジャック・アレキサンダー**の記事
4. AAの転換点を支えた原理

2

第三のグループ クリーブランドと AAの周知

(3)

共同創始者たちのグループ

Not-God147

- 最初の二つのグループには共同創始者が
 - **アクロン** ドクター・ボブ・スミス
 - 医者として一人ひとりに関わった
 - **ニューヨーク** ビル・ウィルソン
 - 積極的にAAを周知させたい熱意を持っていた
- この二人が皆にソブラエティをもたらしたと考えられていた
 - **創始者たちはそれぞれのグループの発展に影響を及ぼしていた**



(4)

三番目：クリーブランド

Not-God 149-150

- クラレンス・S (Clarence Snyder, 1902-1984)
- 1939年1月：妻ドロシー・S
 - デイルワース・ラプトン牧師 (Dr. Dilworth Lupton)
 - 第一ユニテリアン教会、この目で確かめたいが・・・
- 1939年夏、クリーブランドのグループが安定した
 - カトリックもいる、オックスフォード・グループとは関係ない
 - *Mr. X and Alcoholics Anonymous* — 1939年11月26の説教をパンフに
 - 『プレインディーラー』紙で紹介してくれた

Clarence S.

DBGO 236-238

(5)

プレイン・ディーラー紙の記事

Not-God 150

- 1939年10月21日～11月4日に7回の連載記事と社説
- エリック・B・デイヴィスの署名入り
- 好意的にAAを紹介した
- エリックはクラレンスが助けたアルコールク
- この記事によってAAメンバーが急増したと記憶されている——がそうではなかった

THE CLEVELAND PLAIN DEALER, SATURDAY, OCTOBER 21, 1939

Alcoholics Anonymous Makes Its Stand Here

By ELRICK B. DAVIS

Much has been written about Alcoholics Anonymous, an organization doing major work in reclaiming the habitual drinker. This is the first of a series describing the work the group is doing in Cleveland.

Success

By now it is a rare Clevelander who does not know, or know of, at least one man or woman of high talent whose drinking had become a public scandal, and who suddenly has straightened out "over night."

of their families who all that time had been emotionally distraught, social and economic victims of another's addiction.

These ex-ruminants, as they call themselves, suddenly salvaged from the most socially noisome of fates, are the members of the Cleveland Fellowship of an informal society called "Alcoholics Anonymous." Who they are cannot be told, because the name means exactly what it says. But any incurable alcoholic who really wants to be cured will find the members of the Cleveland

to. He drinks because he can't help drinking.

He will drink when he had rather die than take a drink. That is why so many alcoholics die as suicide. He will get drunk on the way home from the hospital or sanitarium that has just discharged him as "cured." He will get drunk in the wake of a friend who died of drink. He will swear off for year, and suddenly find himself half-seas over, well into another "bout." He will get drunk at the gates of an insane asylum where h

Clarence S.

1939年10月 — AACA 30,32,205,272, DBG0 301,304

(6)

野球選手 ロリー・ヘムズレイ

Not-God151

- クリーブランド・インディアンズ
- 1940年4月16日 ホテルで会見
- ボブ・フェラー投手 後に殿堂入り
 - 18才のフェラーに良い捕手を
 - しかしヘムズレイは酒のトラブルばかり
- 1939年にオーナーがドクター・ボブたちのことを知る



Rollie Hemsley (1907-1972)

自分の球場内外での過去の奇行は「酒」によるものであり、いまは一年ほど飲まない生活が続いていること、そして彼の断酒継続はAAのおかげである、と公言した。

(7)

クリーブランド特有の不安

Not-God152

- 最初の二つのグループ
 - **ニューヨーク** — 街の規模が大きく、雇用機会が大きかった
 - **アクロン** — 市民同士がOGにも慣れていたので、再就職が容易
- **クリーブランド**
 - 酔っ払いと知られる影響は大きく、**匿名性**は得に大事にされていた。
 - **OGが起源** → 知れてしまうと宗教家たちの支持を失ってしまう
 - **OGというルーツを否定する** → 親OG派がAAを乗っ取りかねない

OGとの関係は亡霊のようにAAにまとわりついていた

(8)

不安の解消と曖昧さ

- ヘムズレイを通してAAが知れ渡った
 - メンバー数が増加し、クリーブランドAAの不安を和らげた
- 一方で匿名性 anonymity は曖昧になった
 - ビルは *Saturday Evening Post* に写真を載せることを許可した
 - そうでなければ掲載されなかった可能性が高い
 - マーティ・マンはあえて実名で活動した
- アルコホーリクス・アノニマスという名称と齟齬 → 問題化

(9)

クリーブランドのグループの分裂

- グループの分裂には四つの要因が働いていた
 - 匿名性（アノニミティ）に対する姿勢の違い
 - オックスフォードグループとの関係性の濃淡
 - メンバー数の急増
 - クリーブランド近郊の地理的事情（川と谷で二分されている）



(10)

分裂期に発展した三つの特性①

- **交代制**（輪番制） — リーダーやグループの役割
 - 投票ではなく、ソブラエティによって（順番に）選ばれた
 - 個人やグループを喜ばせるより、**プログラムへの責任**が重要視された
 - 皆で担うささやかな役割に、誰かがずっと留まることも、誰かが締め出されることもなくなった
- 第一の忠誠はプログラムに尽くされた
 - 「奉仕をまかされたしもべ」 trusted servants
 - 「各個人よりも原理を優先すべきこと」 principle before personalities

(11)

分裂期に発展した三つの特性②

- **スポンサーシップ**
 - 要因：メンバー数の増加、新しいグループの誕生、アノニミティに対する姿勢の違い、オックスフォード・グループに対する姿勢の違い
 - 「自分も同じであると認めること（identification）」
 - 「プログラムを身につける」ための唯一の道ではなくなったが、主要な道
 - 「この簡潔なプログラム」は「誰でも身につけられる」
 - 「与えることによってのみ（酒のない生活を）保つことができる」
 - 「他の人に働きかける」ことが欠かせない

(12)

分裂期に発展した三つの特性③

Not-God157

- **分かち合い** sharing
 - OG由来の言葉で、一度は遠ざけられたが、復活した言葉
 - オックスフォード・グループ由来の、インフォーマルな個人宅を開放するような親密さは、AAが成長するにつれて維持できなくなった
 - 毎日顔を合わせるような「共同生活」も同様だった
 - そこで、OGとの繋がりを否定しつつも、その母胎に戻ってAA独自の実践を通して鍵をつかもうとした。分かち合いを通して：
 - **正直さ** (=脆弱性・不完全性を認めること) 神ではないこと
 - **アイデンティフィケーション** (同じであると認めること)

(13)

プレイン・ディーラー紙以前の記事

Not-God158

- **リバティ誌**1939年9月30日号 モリス・マーキー記者
「アルコールと神」 (AACA271-272)
- 1939年夏 **ラジオ番組**、ガブリエル・ヒーターがAAメン
バーのモーガン・Rにインタビュー (AACA264-265)
- ハンク・Pが資金を募り医者**に宣伝葉書**を送る
(AACA265, 267-268)
- いずれも効果がなかった

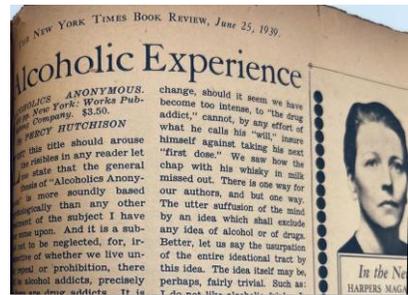


(14)

プレイン・ディーラー紙以前の記事

Not-God160

- フォスディック牧師 ニューヨークヘラルドトリビューン紙に書評を寄稿
しかし掲載されず (AAC4486-488)
- 1939年6月 パーシー・ハッチンソン記者『**ニューヨークタイムズ**』
宗教ではなく心理学に焦点を当てての書評
- 1939年11月13日『**ワシントンポスト**』紙が
タイムズのハッチンソンの記事を取り上げて
好意的に評価
→ 1940年4月 ヘムズレイヤ
1940年2月 ロックフェラーの評価



(15)

ロックフェラーの晩餐会

Not-God161-163

- 1937年12月年末 個人会議室でのミーティング → 5,000ドル
- 1940年2月4日ニューヨーク市の**ユニオンクラブ**で晩餐会
招待客400人のうち75人が参加
- **ビルとボブ**がストーリーを語った
- 宗教家を代表し**フォスディック**博士
- 神経科医**フォスター・ケネディ**博士



— AAC4 278-279

(16)

ロックフェラーの善意

- ジョン・D・ロックフェラー・ジュニアは急病のため参加できず、息子のネルソンが主催者を代講した
- 「これは善意の事業だ。AAは経済面では自立しているべきだ」
= 援助は要らない AAメンバーたちの期待は裏切られた
- 後日、ロックフェラーから、スピーチの筆記録とビッグブックを招待者400人に送りたい ビッグブックを格安の1ドルで売った
- 「この運動は自立したものであるべき」といいつつ1,000ドル寄付する
- その他からも2,000ドルの寄付があった。

— AACA 281-282
(17)

AAがメディアに周知される

- 金銭よりも重要なことはAAが周知されたという結果だった
- ロックフェラーの広報コンサルタントであるアイビー・リー社がAAと共同でメディア関係に発表する声明文を作成した
- 多くの新聞がリーによるプレスリリースをその表現どおりに載せていた
- 助けを求める書簡やビッグブックの注文が「殺到し、晩餐会の客たちが去ったあとのひどい失望はいまや忘れられた」
- ロックフェラーによる晩餐会は、期待と、メンバーの失望、そして最終的にその両方を解決した

— AACA 282-283
(18)

ビル・Wのドライ drank と ダウリング神父との出会い

(19)

二つの言い回し

Not-God165

- カッコよくはないがぴったり合う **二つの言い回し**
 - **alcoholic grandiosity** — アルコホーリック特有な **誇大感**
 - **ドライ drank** dry drunk
- これらの特徴づけるもの
 - 「降伏」を撤回すること
 - 「底突き」を忘れてしまいがちなこと
 - 自分の生き方と意思のコントロールを再び取り戻そうとすること
 - ソブリエティを続けるのが難しくなるほどの、飲んでいないのに心が落ち着かない状態

(20)

ビルにかかる重圧 ジレンマ①

Not-God166

- 「手放し、神にゆだねる (Let go and Let God)」という敬虔主義 pietism は、このAAを周知させる時代を通じてビルに重圧をかけていた。
 - 彼の初めての成功例で支え手でもあったハンクが再飲酒
 - ビルの友人でビルがスポンサーとして尊敬していたエビーも再び飲み始めた
 - クリントン通りの家を手放し、家無しになった
 - ビッグブック広報の初期の失敗
 - 資金集めの苦勞（特にロックフェラーからの資金集めが期待と異なった）
- しかし、原罪のような宗教的な考えを彼は避けた
ここで問題になっているのは「プライド」である—自己中心性

— AACA 263-264, 272-273
(21)

ビルにかかる重圧 ジレンマ②

Not-God167

- 1940年4月 ヘムズレイの話が氏名と写真入りで新聞に掲載された
 - まだ発展途上の匿名制 anonymity の原則をどう理解するか
 - アノニミティは事実、第一の原理として深く認められつつあった
 - AAは組織 organization というよりも共同体 fellowship であるという感覚も基本的なガイドラインとして現れつつあった
 - 「狂気と死という双子の怪物」以外に、AAには規律を与えてくれる中心権威はない
 - 共同創始者であるビル・Wも中心的権威にはなり得ない
 - とはいえ、AAに利益をもたらしているロリー・ヘムズレイだけを特別扱いするわけにはいかない

— AACA 287-288
(22)

三つの段階(ドライドラクの)

Not-God167-168

1. ビル自身の「自分だけは例外だ」という考え
 - ビルにとってドクター・ボブはあくまで「もう一人の酔っぱらい」にすぎなかった
2. ビルの新しい振る舞いに対する意見の衝突と論争を「受けて立った」
 - ハンクがアクロンとクリーブランドに旅をし、ビルの悪評を広めた
 - ビルはこの「挑戦」に乗ってしまった
 - 恨みに自分自身を陥れているのは傍目にも明らかだった。
3. **上がったものは落ちるしかない**—どちらもドライドラク
 - 1940年の冬の始まりには、彼は落ち込んでいた。彼の行動は批判しか受けなかった
 - 当時ウィルソン夫妻は家を追い出されて24番街のクラブハウスに住んでいた

(23)

エド・ダウリング神父との出会い

Not-God169-

- 1940年後半の初冬、肌寒く雨の降るある晩
- 夫妻が住んでいたクラブハウスに一人の来客
- **エドワード・ダウリング神父**
- イエズス会の神父・カトリック出版の編集者
- AAの**12ステップ**と、彼の属するイエズス会の聖イグナティウスによってつくられた『**霊操**』との**類似性**を直観して興味をもった



Edward Dowling (1898-1960)

- その晩、エド神父はウィルソンと霊的な生き方についての理解を分かちあった

(24)

続き

Not-God171

- その後もビルは気持ちはどうなんだと話しかけてくれているような印象が続いた。このように耳を傾けてくれる人の愛に満ちた存在をウィルソンが感じたのは、オックスフォードグループに参加していた初期のころ以来だった。当時、ビルはエビーに対していろいろと自分の抱えている重荷をおろしていた。
- いま、このダウリング神父との夜がふけるにしたがい、ようやく自分がステップ五に取り組んでいるように感じた。

彼はこの新しいスポンサーに、いままでとってきた行動やとってこなかった行動の裏にある感情や考えを立て続けに話した。彼はもっている高い希望、計画、そして怒りや絶望、積りに積もった不満も話した。

(25)

続き

Not-God171

- イエズス会の神父は耳を傾け、『マタイによる福音書』を引用した。「**飢え、乾いている人は幸いである**」。そして、彼は、神に選ばれしものはつねに切なる思い、不安、渇きによってきわだつものである、と話した。
- 彼はさらに優しい声音で「神に由来する不満」がビルの原動力となり、到達できない目標に手を伸ばすことによって始めて、いまは彼にはみえないものを得ることができる、それが神から与えられた目標である、と続けた。彼のもつ**不満**、まさにその「**渇き**」を受け入れることは神聖であり、ダウリングの与えるビル・ウィルソンへの贈り物であり、ビルをとおしてアルコールクス・アノニマスへの贈り物となった。

(26)

続き

- ビルの祈りは応えられたのではないか。飲まない生活を得ているのではないか。・ ・すでにすばらしい贈り物がある以上を要求する君は、いったい自分を何者だと思っているのか。
- さらに**探究 seeking**を重ねることはよいことだが、さらに**何かものを求める demand**ことはどうだろうか。
- 彼が**要求がましいこと being demanding**こそがこれまでも、そしていつも、彼の**霊的な問題の中心**であったのだと。

(27)

ジャック・アレキサンダーの記事

(28)

1940年のAAの地域的な広がり方

- 1940年においては**セールスマンたちの働き**によるものだった
- 多くはセールス業を生業としており、再び**各地に出張**に
- 彼らはそれらの都市でアルコールクを探し出しては、このプログラムを分かちあった
 - アクロン、クリーブランド
 - ミネアポリス、ミルウォーキー、そしてセントルイス
 - ニューヨーク → ボストン、マイアミ、そしてその間の各都市

(29)

ジャック・アレキサンダーの記事

- 1940～41年の冬、24番街のクラブハウスを**ジャック・アレクサンダー**が訪れた
- 『**サタデーブニングポスト**』誌のオーナーであるカーティス・ボク判事から記事を書いてみないかと。
- 懐疑的なことで有名なライター
- AAの正体を突き止めてやろうと決心した



Jack Alexander

— AACCA 53-54, 289
(30)

1941年3月1日の記事

Not-God175

- 記事のおかげでAAのメンバー数は全国的に急速に増加し始めた。
- 10カ月でメンバー数は2,000人から8,000人へと4倍に増えた。
- アルコホーリクを新しい人のもとへ送り出すことが不可能になった
- このプログラムは「本をとおして受けとる」ものとなった



(31)

記事の前と後

Not-God175

- ロックフェラーの夕食会の後で、こうしたグループは急増したがそれでもニューヨークやアクロンから人を派遣することができた。（中心地はアクロンとニューヨーク）
- ところが『サタデーイブニングポスト』の記事により状況がまったく変わった
- 訪問者ではなくビッグブックがメッセージを伝える主な手段になった
- 出版と配送をになっているニューヨークがAAの中心になった

— AACA 291-292, 296-300
(32)

AAの転換点を支えたもの

(33)

転換点における拠り所

Not-God176

- 転換点を迎えるにあたって、ビルやAAが拠り所にしたもの
— **自分たちの歴史**
 - **経験**が優位におかれるべき—**有用性**（プラグマティズム）
 - 二つの側面から保護してくれる**匿名制**（アノニミティ）
 - 「**限られたコントロール**」という感覚
 - **権威**の実行に内在する危険に対する警戒心
 - **組織**そのものに対する事実

(34)

経験が優位におかれるべき

- 出版事業 works company、第五章 How it works
- 飲んでいるアルコールクでさえ、彼らのソブラエティに関心を持つ — how does it work?
- 内容はアルコールリズムの原因や起源や治療法ではなく、「彼らが実際にやったこと」、経験を通して知ったことを提供していた 彼らの経験 (うまくいったこと) を分かち合う本だった

(35)

経験の優位性の強調

- ビル・W 1941年からオフィスへの手紙に返信するという仕事
 1. もし私があなたの問題・状況を正しく理解しているとすると、……に似ているようです。
 2. そのときにはこのようなことがなされました。
 3. そしてどういった結果になったかという、こうです。
 4. そして効果についての一言。「しかし、もちろん私の理解に従う必要はありません。私にできることは、過去には何がうまくいったかをお伝えすることだけです。そしてあなた自身が経験を重ねられて、この問題とAA自体とを、私たち全員がよりよく理解することを助けてくださると願っています」
- プラグマティズムの生きた事例

しかし、「経験」は柔軟性に欠けた規範にすらなりうる

(36)

匿名性(anonymity 無名性)

- 二つの側面をもつ経験をもとに生まれた
 - 個人のアルコールクを経済的な制裁から守ること
 - そのメンバーが犯しうる失敗からAA共同体を守ること
これらはそれほど大きな問題ではないことが分かった
- 「**誇大感 grandiosity**」がすべてのアルコールクにとってのいちばんの危険であることが理解された
 - 匿名制（アノニミティ）として課された**限界を進んで受け入れること**
こそが、もっとも確実なソブラエティ

— AACA 53-54
(37)

コントロールには限界がある

- **限られたコントロール Limited control**
 - 新しい経験に対して自分が閉じてしまわないようにする
 - あらゆるコントロール、過去の経験をとおしてのコントロールさえも、限界がある → 「絶対的なもの」に対する慎重さ
 - もう二度と飲むなという要求は非現実的
「二四時間のプログラム」「今日一日のプログラム」
←主の祈りの「今日の糧をお与え下さい」

(38)

コントロールには限界がある

- 「何かをすることはできるが、全部をすることはできない」
You can do something, but not everything
 - このメッセージは、誇大感から彼らを守るために、また彼ら個人の自己の価値を肯定するために用いられた。
 - 「神の独占権は私たちにはない」
「アルコールイクスの治療の独占権は私たちにはない」
 - 伝統3「メンバーになるために唯一必要なのは、飲酒をやめたいという心からの願いだけだ」

コントロールする必要もないし、コントロールできない

(39)

権威に対する警戒心

- アルコールイクスは基本的に**反抗的** rebelliousness な性質をもつ
- **二つの方向性**
 - 厳密なしっかりした構造をもち、中心に権威がある組織
 - 開かれてもやっていけて、中心的権威なしでもすむ道
- 権威を求め「第一の人物」であることを求めた彼自身の欲求にもかかわらず、ウィルソンは一つめの選択肢を本気でめざすことはなかったと思われる

(40)

Rule #62

- 1940年の初め、ウィルソンより出世欲の強いあるアルコールク
 - 三つの事業：クラブ、診療所、そして貸付業。61の規則
- オフィスに「特別許可」を求めてきた。
 - 「この計画よりもおとなしいものですら、どこでも失敗してきました。とはいえ、自立したあなたのグループには、私たちの警告を受け流してこの計画を試してみる権利があります」
- ルール62「あまり自分のことで深刻になりすぎるな、笑えるようになれ」

— 12&12199-202
(41)

中心に権威のない組織

- ウィルソンの影響で、アルコールクス・アノニマスは**中央に権威をもたず**、組織化した構造を最低限にする、という約束を徹底した
- AAに異なった発展を求めて説得する人びとがずっとあった
 - ハリー・ティーボウ — 権威の放棄は責任の放棄 未成熟だ
 - ジョン・フォード神父 — AAを「無政府状態」であると批難
- 「私たちには飲み続けければ狂気か死、という圧力がある」

(42)

伝統2

Not-God186

- 「私たちのグループの目的のための最高の権威はただ一つ
——愛の神である」
- 規律を強いる存在は「ジョン・バーリコン」 [=酒] のみ

「というのもプログラムから逸脱すればその結果は飲酒であり、飲酒の結果は狂気が死である。そして私たちはそれで十分効果的だと考える。神が正してくださるのだから、私たちが余計なことをする必要などない。私たちはその仕事を、ジョン・バーリコンにゆだねるだけでよい」。「大いなる苦しみと大いなる愛がAAに規律をもたらす存在であり、私たちにはほかの何者もいない」

— 12&12237
(43)

権威に対する警戒心

Not-God186

- **反権威主義**（反知性主義）、**反組織化**の共同体
- 「原始キリスト教」
 - AAに先行した、原点に立ち戻ろうという試み〔オックスフォードグループのこと〕は、予想どおり運命に苦しんだ
- **個人のカリスマ**には落とし穴が潜んでいる
- ビル・Wという人物とその性格からAA全体を保護する
→ **12の伝統**（創始者からAAを守る者）

(44)

経験と課題

- いままでの経験からの教訓を明確に整理すること
A A 共同体にそれを継続して伝えていくこと
- コントロールが限界あるものと知ることが正しい道
 - 酒をやめていても、アルコールは神ではない
 - 自分の限界を認めてはじめて全体性を獲得しうる
 - 同じことが、アルコールの集まりであるAAについても言える
 - AAは人間的な限界をもつ存在であり、神ではない。
本質的に限りのある存在なのだ。

(45)

経験と課題

- しかし、A Aは同時にソブラエティを実現するために存在するので、人間を人間らしくさせるものでもある。
- このような責任の限定があると受け入れることで、A Aは神のようなものでもないが、限界を受け入れることになり、そこではじめて全体として存在することができる
(限界を受け入れることでAAは全体性をもった存在となる)

次回第五章につづく

(46)

ご静聴、ありがとうございました。



from Back to Basics – AA Beginners Meeting